

本を読んでくれるおばあちゃん

シム・ゲオク

私の母方のおばあちゃんの名前です。

おばあちゃんは一人で田舎に住んでいます。

おばあちゃんは静かに家でじっとしているのが好きです。

老人会にでも行って、他のおばあちゃんたちといっしょに遊びに行ったりしたらいいのに、おばあちゃんは自分のうちが一番気が楽だと言うんです。

私のおばあちゃんは字が読めません。

お母さんが子供の時、おばあちゃんは学校からもって来た本を読んでいるお母さんの声を聞くのが、大好きだったそうです。

私は本をたくさん読んでくれたお母さんのおかげで、ハングル¹⁾がすぐ覚えられました。

私が毎晩、本を読んであげたら、おばあちゃんもしぜんに字が覚えられるんじゃないでしょうか。

おばあちゃんは絵本が好きです。

私が大きい声で本を読んであげると、まっ暗だった世界がとても明るくなるようだというんです。

私は寝る前におばあちゃんに電話をします。

絵本を読んであげようと思って。

毎晩、私はおばあちゃんに絵本を一冊読んであげます。

1) 韓国固有の文字

すると、おばあちゃんはいつも同じ場面でこうふんするんです。

「ええいっ、この！けしからん。その長い手で引っ張り上げて行きゃあいいのに……。」

それからまた静かに聞くんです。

「おばあちゃん、寝ちゃったの？」

「いや、寝ちゃおらんよ。つづけておくれ」

おばあちゃんは私が読んであげる絵本の話の話を聞きながら寝てしまいます。

「おばあちゃん、もう寝ちゃったの？」

「……。」

おばあちゃんの返事がなくなると、私もようやく本を閉じて眠りにつくことができます。

私がおばあちゃんに本を読んであげるようになってから、もう一年がたちました。

おばあちゃんは今年、80歳になりました。

今日はおばあちゃんの80歳のお祝いの日です。

おばあちゃんは歌を歌うのも、踊るのも苦手なので、親しいしんせきだけが集まって、ごちそうを食べることにしました。

お母さんとお父さんが立ち上がって、お祝いに集まってきてくれた人にお礼のあいさつをしました。

すると、静かに座っていたおばあちゃんがそっと立ち上がり、一冊

の本を開きました。

それはまさしく、私がおばあちゃんに一年間、一日も欠かさず読んであげた本でした。

「今日は忙しい中、この年よりの祝いのために、わざわざ集まってもらって本当にありがたいねえ。今から私にこの本を読ませてもらいたいんじやが……。」

おばあちゃんはとても静かな声でゆっくりと本を読みました。

私のおばあちゃんが絵本を最後まで読み上げたんです。

しかも一字たりとも飛ばしたりしないんです。

その場にいたしんせきのおばあちゃんも、お父さんも、

お母さんも、そして私もとてもびっくりしました。

お店の中にいた他のお客さんたちもみんな拍手しました。

お母さんがおばあちゃんをギュッと抱きしめました。

今、私のおばあちゃんは「絵本を読んでもくれるおばあちゃん」です。

おばあちゃんは毎晩、私に電話で絵本を読んでもくれます。

「ミンジョンちゃん、もう寝ちゃったのかい？」

「ううん……まだ寝てないよ、おばあちゃん。」

私はおばあちゃんが読んでくれる絵本の話の話を聞きながら眠りにつくのでした。